

## 令和3年度 野生鳥獣との共存に向けた生息環境等整備調査（屋久島地域）

### 報告書要約版

#### (1) 生息密度調査（糞粒法）

##### 【調査内容】

- ・ 下記 5 地点の調査結果からヤクシカの生息密度を推定し、地域間比較等を行った。さらに、過去にも調査されている地域に関しては、推定生息密度の増減と増加率を求めた。
- ・ 一湊林道（北）、愛子西（北東）、尾之間下（南）、大川林道奥（中央）、宮之浦林道（中央）

##### 【結果】

- ・（増加）宮之浦林道 （減少）一湊林道、愛子西、尾之間下、大川林道奥
- ・ 捕獲が続いている宮之浦林道で増加、大川林道奥で減少の傾向が見られ、隣接地域からのヤクシカの流入・流出や、捕獲を免れた警戒心の強い個体の繁殖の可能性がある。

#### (2) 植生の保護・再生手法の検討

##### 【調査内容】

##### ①植生保護柵の保守点検

- ・ 既存植生保護柵 31 箇所（植生保護柵 23 箇所・萌芽枝保護柵 8 箇所）の維持管理。

##### ②マテバシイ萌芽枝の生育状況

- ・ 柵内外のマテバシイ母樹、萌芽枝、及びカシノナガキクイムシの穿入痕調査を実施。

##### ③植生保護柵内外の植生調査

- ・ 柵内外それぞれ 2m×2mの小プロットを 4 地点設定し、低木層（1m以下）と草本層について植物社会学的調査を実施。

##### ④植生被害ライン調査

- ・ 一湊林道（北）、愛子西（北東）、尾之間下（南）、大川林道奥（中央）、宮之浦林道（中央）

##### 【結果】

- ①愛子 800m では柵の破損が確認された。柵の中に落葉落枝が集中する緩い沢が含まれることが原因とみられ、沢を外した北寄りに柵を移設した。
- ②カシノナガキクイムシ（以下、カシナガ）の穿孔被害を川原地区で3年ぶりに確認した。同地区で大規模なマスアタックを受けたのは初めてである。被害を受けた 1 本は胸高直径が 19.7 cmになり、カシナガの繁殖に適したことが考えられる。柵を倒壊する恐れのある大径の枯死木が生じた。
- ③食害の激甚な地域では、不嗜好植物の出現割合が柵内でも高かった。柵外で実生本数が増加している地域は、柵内で繁茂した不嗜好シダ類が柵外へ逸出し、植物の実生がそれに紛れて生長していた。愛子地域では柵内外による差が少なく、これまで調査を続けてきた他の地域と比べても種数・実生本数が多かった。ヤクシカの捕獲圧が高まったことにより、植生保護柵外でもほとんど採食圧を受けていないことが考えられる。
- ④全ての調査箇所では出現本数は減少し、尾之間下、宮之浦林道では種数の減少も見られた。

多くの地域で嗜好度の高くない植物の食害が目立ち、ヤクシカが採餌に困難な状況が考えられる。

### (3) 森林生態系の管理目標に関する現状把握・評価

#### 【管理目標】

- ・①屋久島の多雨環境を反映したシダ植物の林床被度の回復②屋久島世界自然遺産の顕著な普遍的価値である植生垂直分布を形成する植物種の多様性の回復③ヤクシカの嗜好性植物種の更新④絶滅のおそれのある固有植物種等の保全

#### 【現状評価】

- ①多くの地点で柵内外の被度が目標に至っていない種が多く見られた。
- ②標高 600m 以上の 4 標高帯において種数が増加し、目標を達成していることが確認できた。しかし標高 200m、400m の低標高帯については、5 年前より種数が増加しているものの、調査開始当初の 2001 年度の種数より少なく、目標には至っていない状況であった。
- ③各標高帯の確認種数については、途中増減があったものの、2021 年度調査結果が調査開始時の 2001 年度と同程度で、特に直近の 5 年前と比較すると概ね維持または増加傾向にあり、種数の点からは目標を達成している状況であった。
- ④確認箇所数については、過年度の状況を維持しているが、確認箇所ごとに確認種数を見ると減少箇所もあり、これらの箇所については注意する必要がある。個体数については、地生種で 10 箇所、着生種で 5 箇所において減少しており、これらの箇所では目標に至っていない状況であった。

### (4) 高層湿原におけるヤクシカの生態調査

#### 【調査内容】

- ①自動撮影カメラによる分析
  - ・夏季から冬季にかけて自動撮影カメラ 10 台を 20 週間以上設置し、画像データを分析。
- ②糞塊調査
  - ・冠水状況と植生群落状況から区分し、花之江河 33 箇所、小花之江河 22 箇所を実施。

#### 【結果】

- ①跳躍、闘争等の行動や、雪の中を歩行するヤクシカが確認された。昨年度撮影されたヤクシカの GPS 首輪装着個体の他、ノイヌ、タヌキ、コイタチは一度も撮影されなかった。GPS 首輪は脱落した可能性が高いと考えられる。また、幼獣の延べ撮影頭数が減少した。根雪期間の長期化により、妊娠した雌が下山し、幼獣が花之江河に戻ってきていない可能性がある。
- ②8 月は小花之江河の方が花之江河よりも糞塊数が多かった。8 月は台風直後の調査で、小花之江河ではいつもと異なる区画に水没した糞塊を確認した。花之江河は糞塊が流出したことが考えられる。11 月は例年どおり花之江河の方が小花之江河よりも糞塊数が多かった。